

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：17702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22500548

研究課題名(和文)日本の伝統打球戯の独自性と文化的意義に関する研究

研究課題名(英文)Cultural Features and Significance of Traditional Japanese Stick Games

研究代表者

山田 理恵(YAMADA, Rie)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：60315447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、打毬や毬打(「毬杖」とも表記)、ハマ投げなどの日本の伝統打球戯について、現地調査と資料収集を行い、それらの展開、独自性と文化的意義を明らかにするとともに、学校教育プログラムにおけるそれらの伝統打球戯の継承事例について考察した。さらに、それらを通して、伝統的運動文化を現代の身体教育において継承することの意義と在り方、課題について考察を行った。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the vicissitude, the cultural features and significance of the traditional Japanese stick games such as dakyu, gitcho, and hamanage, and to discuss the practical examples of these traditional stick games in school education programs at present. It also examined the significance of passing on the traditional sport and game cultures to today's physical education and the problems to achieve it. The materials used in this study were collected mainly through fieldwork and investigation on historical sources on those traditional Japanese stick games.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 ・ 身体教育学

キーワード：身体教育 身体運動文化 伝統スポーツ 打球戯

1. 研究開始当初の背景

日本の伝統的な運動文化の文化性や現代的意義については、これまで、相撲、剣道、柔道、弓道などの武道文化については論じられてきているが、伝統打球戯の文化的意義が注目されたことはなかった。

日本の伝統打球戯・打毬は、岩岡の研究論文および事典の叙述(岩岡、1976、1986、2009)において、西アジアで行われていた馬上から球を打ち合う遊戯が古代日本に伝わり生まれたものであることが述べられている。民俗学の柳田國男も打毬、毬打(「毬杖」とも表記する)、ハマ投げなどの競技法について述べてはいるが、それらの系譜や文化的位置づけを明確にはしていない。

また、日本の伝統的なボールゲームである蹴鞠の形態と推移は明らかにされているが、打球戯については、その伝統性が注目されたことはあまりなく、現代の学校教育プログラムにおける継承の実態など、伝統打球戯の現代への適応過程も明らかにされていない。

したがって、本研究は、伝統的身体運動文化の実証的研究として身体教育学に新たな知見をもたらすものであり、また日本の伝統文化の発展に寄与する研究であると位置づけられる。

2. 研究の目的

本研究では、打毬や毬打、ハマ投げなどの日本の伝統打球戯の独自性に焦点をあて、それらの文化的意義を明らかにし、また学校教育プログラム等における継承事例を検討することを通して、現代の身体教育における伝統的運動文化の意義と在り方について考察を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、現地調査と資料収集を行い、それらの成果に基づいて、日本の伝統的な打球戯の系譜と近現代における展開、文化的意義と課題について考察を行った。

具体的には、まず、日本の伝統打球戯が、前近代においてどのような形態と目的で行われ、近代という時代の文化・社会的状況や社会的ニーズとの関係のなかで、どのように目的や形態を変容させながら継承されたのかを、前近代・近代の連続性に着目しながら実証的に明らかにした。騎馬打毬の背景となる日本の馬事文化全般に関する資料調査も行った。

また、今日まで継承されてきている日本の伝統打球戯について現地調査を行うとともに、近現代の学校教育における伝統打球戯の実態と現代への適応過程について、教材化の観点から考察した。

同じ源をもつと考えられている東アジアや西洋の打球戯についても資料調査を行い、吟味・検討した。

以上をふまえ、伝統的運動文化を現代の身体教育において継承することの意義と在り方、

課題について考察を行った。

研究成果は随時公表した。

4. 研究成果

(1) 日本の伝統打球戯の系譜に関する文書史料を収集し、吟味・検討した。

絵画史料については、毬打、打毬、打毬戯、ハマ投げなどが描かれた絵巻物、屏風絵、錦絵、挿絵等を収集し、吟味した。

アジアの打球戯についても、絵画史料に着目し、資料調査・収集を行い、得られた資料を解説・吟味した。

(2) 今日日本の伝統打球戯では、長者山新羅神社(青森県八戸市)の八戸藩加賀美流騎馬打毬と徒打毬、豊烈神社(山形市)の山形水野家附伝騎馬打毬と徒打毬、宮内庁主馬班騎馬打毬、桑名の打毬戯(三重県桑名市)、薩摩のハマ投げ(薩摩・大隅地方)が継承されている。

岩岡(1961、1962、1965、1972、1976、2009など)は、加賀美流騎馬打毬・徒打毬を中心に、打毬発達史の先駆的研究を行っている。

八戸、山形の徒打毬、桑名の打毬戯、薩摩のハマ投げは、今日学校教育プログラムに組み込まれ実践されている(八戸市の向陵高等学校の徒打毬、山形市立第一小学校打毬クラブによる徒打毬、桑名市立立教小学校の運動会種目としての桑名の打毬戯、鹿児島市立草牟田小学校の「総合的学習の時間」における薩摩のハマ投げなど)。

これらの伝統打球戯について、現地調査・資料調査を行い、伝統打球戯の教材化と現代への適応化という観点から考察を行うとともに、伝統的運動文化を現代の身体教育において継承することの意義と課題について検討した。



山形水野家附伝騎馬打毬(山田撮影)



山形市立第一小学校打毬クラブによる徒打毬(山田撮影)

(3) 日本の伝統打球戯が明治に入りどのように目的や形態を変容させながら行われていたのかを明らかにするために、横井琢磨編『實地體育法前編 卷之貳』（岡山県岡山学校蔵版、1886<明治 19>年）（国立国会図書館蔵）の叙述を手がかりに、近代児童の遊戯としての打毬について考察を行った。

横井琢磨については、先行研究によって、体操伝習所の卒業生であり、『體育論』（1883年）の編者であることが知られており、『實地體育法』については、戸外遊戯を中心に紹介されている。

同書は、前編・後編各3巻の全6冊からなる。打球遊戯については、「現ニ欧米各國ニ行ハル、遊戯法及ビ日本固有ノ遊戯中児童ニ適切ナルモノヲ採擇」（前編「緒言」より）し解説した前編の第2巻において、3種の遊戯法が述べられている。前編第3巻には、「打球遊戯第四種 ベース、ボール」も取り上げられている。

本書に描かれた当時の児童の遊戯としての打球遊戯は、武家打毬の様式と類似している。このことは、当時の打球戯と武家打毬の関係は、身体運動文化における前近代・近代の連続性と文化変容の過程を考察するうえでも注目される。

(4) 近代の学校教育に伝統打球戯が継承された背景として、大瀬甚太郎（1865<慶応元>年-1944<昭和 19>年）と山松鶴吉（1872年-1942年）による『講習用書 小學校教育法』（同文館蔵版、1907年）（国立国会図書館蔵）を手がかりに、当時の體育論、体操科の教授法や教材論、遊戯論について明らかにした。

大瀬、山松については、それぞれ教育史上でたびたび取り上げられ論じられてきているが、體育史研究の叙述において注目されたことはなかった。

しかしながら、明治期の教育者たちが、体操科とその教材についてどのように考え、どのように論じていたのかを明らかにすることは、伝統打球戯の教材化と近代への定着の過程を、また日本の伝統打球戯の変容過程を考察するうえで、きわめて重要であると考えられる。そのような意味においても、本研究の意義と独自性があるといえる。

大瀬と山松は、西洋教育思想の影響を背景に三育主義の立場に準拠していたが、特に、小學校教育における体育にかなりの重点を置いており、また、訓育においても体育は効果があると考えていた、とまとめられる。

体操については、毎日の実践が大切であり、平日は学校で、休日は各自必ず体操を行うこと、また遊戯では、地域の状況に合わせて教材を選択するべきである、というような点は、後の山松の著書『小學校各科教授の進歩』（1911年）においても述べられていることから、本書の一部は、後の山松の単著に発展的に継承されたといえる。

(5) 前近代と近代の連続性という観点から、日本の伝統打球戯が、近代に入っても、学校における児童の遊戯種目としてどのような目的と意味をもって継承されたのか、また、その背景として、近代の学校教育において児童の遊戯がどのように論じられていたのか、すなわち、当時の教育者による体操科とその教材としての遊戯論についても触れておく必要があると考えた。

そこで、当時の教育者による体操科と遊戯論について、東京高等師範学校講師時代に山松鶴吉が著した『小學校各科教授の進歩』（同文館蔵版：東京、1911年）（国立国会図書館蔵）を主として用い明らかにした。

山松についてはこれまで、教育史上では取り上げられてきているが、體育史研究の叙述において論じられたことはなかった。山松の体操科と遊戯論に着目したところに、本研究の独自性があるといえる。

本書において、山松は、体操教授の趣旨、教材選択と効果、日課等について詳述している。これらの叙述は、当時の教育者が、小學校教育における体操科の役割を明確にし、教員の認識と指導の在り方について言及した体操・遊戯論として注目に値するものであり、また、近代における身体運動文化の展開を考察するうえで、新たな知見をもたらすものであるといえる。

(6) 武家の子弟の遊戯であったハマ投げが、どのような過程を経て現代に適応したのか、またそれはどのような意義をもっていたのか、その継承の過程を考察した。

近代鹿児島社会教育として継承された、薩摩藩時代における武家の子弟の教育の思想と形態—そのなかで薩摩藩の勇壮な精神と武芸的鍛錬の要素をもつ遊戯・ハマ投げが継承され、現代に至る。このような薩摩のハマ投げの展開は、伝統スポーツの現代への適応過程の事例として、また生涯スポーツにおける伝統遊戯・伝統スポーツの再生と発展という観点からも注目される。

伝統的運動文化は、近代における在り方と前近代からの文化的連続性が、今日に至るまでの継承あるいは衰退・消滅のプロセスに大きく影響しているといえる。すなわち、伝統的運動文化が、社会の近代化のなかで、どのような担い手によって、どのような意図で、どのように行われていたのかが、現代への適応化に繋がっているといえる。

(7) 伝打球戯の文化変容の過程について、絵画史料からのアプローチを試みた。

毬打、打毬、打毬戯、ハマ投げなどが描かれた絵巻物、屏風絵、錦絵、挿絵等を収集・吟味し、イコノグラフィ（*ikonographie*, *iconographie*: 図像学）的研究法を援用しながら、これまでに得られた文書史料も併用して、日本の伝統打球戯が、時代の移り変わりや社会の変化のなかで、形態と目的・意味がどの

ように変容しながら行われていたのかを考察した。

絵画などの図像史料を扱う場合、その史料の来歴、作者の妥当性と作風・目的、それが制作された時代・社会的背景等、綿密な史料批判を行う必要があり、文書史料も併せて収集できれば理想的であるが、絵画史料からのアプローチは、日本の伝統的運動文化の展開を考察するうえで有効であることも示唆された。

(8) 古代西アジアおよびその周辺の打球戯について、絵画史料に着目して、資料調査・収集を行った。

Carl Diem 著『アジアの馬術競技—民族文化史への貢献—(Asiatische Reiterspiele: Ein Beitrag zur Kulturgeschichte der Völker)』(1941年)では、打毬戯も取り上げられている。同書については、加藤(1969、1970、1985)によっても論じられている。加藤も触れているが、本研究によって、アジアの打球戯をめぐっては、ペルシア語文献・記述が西アジアからヨーロッパへの打球戯伝播の重要な痕跡となっていることがより明確になった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8件)

- ① 山田理恵 (2013) 大瀬・山松著『講習用書 小学校教育法』(1907年)にみる体育論と遊戯. 中京大学体育研究所紀要, 査読無, 27: 1-11.

[学会発表] (計 14件)

- ① 山田理恵 (2014) 南九州の伝統スポーツと地域開発. 筑波大学体育史・スポーツ人類学研究室 平成 25 年度最終発表会及び体育・スポーツ史研究会. (筑波大学, 3月2日)
- ② 山田理恵 (2013) 薩摩の破魔投げの現代的意義と課題. 鹿児島市破魔投げ大会第50回大会記念講演会(鹿児島市破魔投げ保存会主催). (招待講演) (ホテルパレスイン鹿児島: 鹿児島市, 12月3日)
- ③ 山田理恵 (2013) 日本の伝統打球戯の文化変容過程—絵画史料からのアプローチ—. 日本体育学会第64回大会予稿集, pp. 97-98. (立命館大学びわこ・くさつキャンパス, 8月30日)
- ④ 山田理恵 (2013) 学校教育プログラムに生きる日本の伝統打球戯—桑名の打毬戯を中心に—The traditional Japanese stick games succeeded in the school educational program: focusing on the Kuwana game of *dakyugi*. 東北アジア体育・スポーツ史学会第10回記念大会抄録集—東北アジアにおける体育・スポーツ史研究の現状と展望—, p. 160. (定山溪ビューホテル: 札幌市, 7月13日)

- ⑤ 榊原浩晃・山田理恵 (2013) 中央アジアの打球戯(ポロ)に関する図像とその解釈に関する研究. 東北アジア体育・スポーツ史学会第10回記念大会抄録集—東北アジアにおける体育・スポーツ史研究の現状と展望—, p. 161. (定山溪ビューホテル: 札幌市, 7月13日)
- ⑥ 山田理恵 (2012) 大瀬・山松著『講習用書小学校教育法』(1907年)にみる体育論と遊戯. 日本体育学会63回大会予稿集, p. 85. (東海大学, 8月23日)
- ⑦ 山田理恵 (2011) 伝統スポーツと近代—九州からの発信—. 日本体育学会第62回大会体育史専門分科会シンポジウム[コーディネーター](招待). 日本体育学会第62回大会予稿集, p. 19. (鹿屋体育大学, 9月26日)
- ⑧ 山田理恵 (2011) 薩摩のハマ投げ. 日本体育学会第62回大会体育史専門分科会シンポジウム[個別シンポジスト](招待). 日本体育学会第62回大会予稿集, p. 20. (鹿屋体育大学, 9月26日)
- ⑨ 山田理恵・渡辺融 (2011) 明治期の体操科と遊戯—山松鶴吉著『小學校各科教授の進歩』(1911年)を手がかりに—. 日本体育学会第62回大会予稿集, p. 68. (鹿屋体育大学, 9月27日)
- ⑩ 山田理恵・渡辺融・榊原浩晃 (2010) 近代の打毬—『實地體育法前編 卷之貳』(1886年)にみる打球遊戯三種について—. 日本体育学会第61回大会予稿集, p. 83. (中京大学豊田キャンパス, 9月10日)

[図書] (計 4件)

- ① 山田理恵 (2013) 騎馬打毬の伝統性と文化的意義. 大熊廣明(監), 体育・スポーツ史にみる戦前と戦後—地方と伝統スポーツ, スポーツ産業と社会, 西洋と日本—. 道和書院, pp. 115-124.
- ② 山田理恵 (2012) 薩摩のハマ投げ—その形態と文化的意義—. 楠戸一彦先生退職記念論集刊行会(編), 体育・スポーツ史の世界—大地と人と歴史との対話—. 溪水社, pp. 141-153.
- ③ 福永哲夫, 山田理恵, 西園秀嗣(編) (2011) 体育・スポーツ科学概論—体育・スポーツの新たな価値を創造する—. 大修館書店: 東京. (総頁数: 223頁)
- ④ 山田理恵 (2011) 伝統打球戯の近現代—薩摩のハマ投げと阿波騎馬打毬—. 阿部生雄(監), 体育・スポーツの近現代—歴史からの問いかけ—. 不昧堂出版: 東京, pp. 377-389.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 理恵(YAMADA, Rie)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号: 60315447

(2) 研究分担者

榊原 浩晃 (SAKAKIBARA, Hiroaki)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号： 50255220